

楽山苑

楽山苑は、江戸時代（1603年～1867年）の豪商、大坂屋三輪家の別邸の跡地にあります。庭園は急斜面に造られ、主屋からは周囲の町や山々を一望できるように設計されています。ツツジが咲き誇る5月中旬には、日没後にライトアップのイベントが開催され、お茶会やコンサート、他の演目などが催されます。

楽山亭と庭園

城のような擁壁に沿った道を進むと、1892年に大坂屋三輪家の11代目当主によって建てられた楽山亭があります。建物はシンプルに見えますが、お客様をもてなすための優雅で快適な空間を作るため、丁寧な技法が施されています。例えば、ベランダの柱の一部を省くことで、眼下に広がる街並みを眺めやすくなるよう配慮し、茶室や浴室、廊下などに客人をもてなすための装飾があります。建物と前庭には、全国から運ばれた石や床の間の珍しい木材など、控えめでさりげない要素に対し多額の投資が行われました。

坂をさらに上ったところに、現在は新潟市の北方文化博物館に保存されている茶室「積翠菴」を再現した建物が建っています。積翠菴の先には小さな観音堂があり、十一面観音菩薩像が安置されています。この仏像は14世紀に彫られたと考えられています。

大坂屋三輪家

武家であった三輪家は、長岡に移住し商家・大坂屋で職を見つけました。のちに、与板（現長岡市）に支店を構える許可を得ました。大坂屋三輪家は廻船業を運営し、米や塩、海産物を京都や大阪に運び、帰りは織物や薬、書籍、その他さまざまな品を運び入れて、富を築きました。18世紀半ばには、大坂屋三輪家は日本で最も裕福な商家の一つとみなされていました。

僧侶・歌人の良寛

大坂屋三輪家は、有名な歌人と書家である曹洞宗の僧侶、良寛（1758年～1831年）と親交がありました。良寛は長岡近郊に生まれ、人生の大部分をこの地域で隠居者として過ごしました。時折別荘を訪れ、特に6代当主の娘である維馨尼と弟の佐一とそれぞれ親交を深めました。後に佐一は良寛の法弟となりました。

楽山苑にある2つの石碑には良寛の言葉が刻まれています。一つは良寛が旅行中に維馨尼に送った、寒い冬の健康を気遣った手紙を再現したものです。もう一つは良寛が佐一の死後に書かれた内容の引用で、大切な友人がいない中で過ごさなければならない来春について思いを巡らせています。